審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2812 号	氏名	相野 一
審査担当者	主 査	千葉 収	(印)
	副主査	内田 政史	(印)
	副主査	鷲田 啓	(印)

主論文題目：Clinical characteristics and prognostic factors for advanced hepatocellular carcinoma with extrahepatic metastasis
（肝外転移を伴う進行肝細胞癌における臨床的特徴と予後因子の検討）

審査結果の要旨（意見）

本研究論文は約 400 例の肝外転移を伴う肝癌(Stage IVB 肝癌)の臨床的特徴や生存率について前治療の有無別に検討したものである。
患者全体の生存期間中央値は 6.8 ヵ月、累積生存率は 1 年/2 年/3 年で各々、31.6%、15.3%、9.5%で生存率において、前治療の有無別に両群間で有意差は認めていない。多変量解析により、Child-Pugh 分類、白血球数、好中球/リンパ球比（NLR）および腫瘍ステージが 419 例患者全体及び前治療歴のない 81 例で独立した予後予測因子して有意差を伴っていたことがわかり、また生存解析結果から、肝機能良好例における肝内病変を含めた積極的な集学的治療の有用性が示唆されている。
本論文は末期肝癌あるいは高度進行肝癌の病態を理解するうえで大変参考になるものであり充分に学位に値するものと考えられる。

論文要旨

目的：肝外転移を伴う進行性肝細胞癌（Stage IVB 肝細胞癌）患者のうち、前治療の有無別に、臨床的特徴や生存率における差異につき評価・検討した。
方法：1998 年 4 月から 2012 年 4 月までの期間に、Stage IVB 肝細胞癌患者 419 名（前治療を有する 338 名と有さない 81 名）を本研究に登録した。前治療歴の有無に伴う 2 群間で転移部位を含めた臨床的特徴や生存に伴う予後予測因子を解析した。
結果：主な転移部位は両群とも類似した結果となった。頻度別に肝外転移部位をみると肺が最も多く、次に骨、リンパ節および副腎への転移が見られた。患者全体(419 名)の生存期間中央値は 6.8 ヵ月、累積生存率は 1 年/2 年/3 年で各々、31.6%、15.3%、9.5%であった。生存率において、前治療の有無別に両群間で有意差は認めなかった。多変量解析により、Child-Pugh 分類、白血球数、好中球/リンパ球比（NLR）および腫瘍ステージが 419 例患者全体及び前治療歴のない 81 例で独立した予後予測因子して有意差を伴った。
結語：Stage IVB 肝細胞癌患者において前治療歴の有無にかかわらず主要転移部位、生存は同様の結果となった。更に、生存解析結果から、肝機能良好例における肝内病変を含めた積極的な集学的治療の有用性が示唆された。